イギリス旅行記 1975年7月—9月

T. グレイをめぐる断片 (2-1)

山本博信*

Journal of a Literary & Historical Pilgrimage to the British Isles, July-September, 1975

Fragmentary Notes on Some Places Associated with T. Gray (2—1)

Hironobu YAMAMOTO*

2

グレイ・カントリと自然

ある意味でグレイの一生はケンブリッヂを交点とするおびただしい数の乱射線の寄せ集めであったといえる．多少の危険をおかしていえば，そこには我が芭蕉や山頭火にも似て，身のおきどころを知らぬ漂泊者の風すらある．その中で彼の生涯における一定の生活の場をあげるなら，ロンドン，ケンブリッヂとならんで，やや派手で低俗に堕する恐れはあるが，いうなればグレイ・カントリ（Gray Country）ともいえる地域がある．

ここでグレイ・カントリというのは，イートン (Eton) からストウク・ポウヂズ (Stoke Poges) に至る一連のグレイ関係の場所を包括していうのであって，バッキンアムシャ（Buckinghamshire）の最南端部一帯の森林地域をさしている．いわゆる今日のバーナム・ビーチズ（Burnham Beeches）とその南外郭部である．

物理的に云えば，この地域でのグレイの生活期間は，その長さにおいてケンブリッヂ，ロンドンの比ではない．グレイは50数年間の生涯のうち，はじめと終りのそれぞれおよそ10年間をのぞく中間の30数年という部分の多くを断続的に，あるいは点的にこのバッキンアムシャに生活したにすぎない．しかし物理的滞在時間だけで，その場所のその人の心に占める重みを測ることは出来ない．重要なのはその滞在時間の長さではなく，そこで精神的物理的に，可視的不可視的に，その人の中に何が生じ，何が残され何が印されたかだ．グレイの場合，バッキンアムシャのこの一帯が彼の人生の文字通り中核をなす部分を大体おおいつくしているといえる．苦しみということを知らなかった'明るい少年期'から，'心を刺す悲しみの矢'と詩作欲の横溢する多感な青年期を経て，油ののりきった成熟期をすぎるまでをグレイはこの地方に関係している．それだけではない．さらに10年の才月をへだてて，グレイはこの地のストウク・ポウヂズの教会の墓地を'その疲れた魂'が地上で最後に帰りゆくべき場所に自からの意志で指定し，永遠の眠りの場としているのである．バッキンアムシャこそは詩人グレイの幼く無垢な魂が芽ばえそれをはぐくみ，やがてその'疲れた魂をなぐさめてくれる'場所であったといえよう．仮に，一定の生活が営まれ人の魂を目覚めさせ慰めてくれる場所を，その人の故郷 (country) というなら，このバッキンアムシャの一角をグレイ・カントリと呼んで大した不都合はないはずだ，丁度，湖水地方をワーズワース・カントリと呼ぶようにだ．筆者がこの一帯をグレイ・カントリと呼ぶ所似である．

グレイ・カントリにおいて，今日訪れられるグレイ関係の明確な土地は極めて少ない．その名をあげても，イートン，バーナム（Burnham），ストウク・ポウヂズの3ケ所に限られる．しかもそれぞれの土地で確証をもってたどれるグレイの足跡となると，いよいよ限られる．バーナムには伯母夫婦が住んでいて，グレイは休暇中によく滞在したらしいが，その所在場所は大体分かっていても，その家までは確認できない．今日，イートン校のほかにその所在と場所のはっきりしているものとい

* 宇部工業高等専門学校英語教室

えば，ストウク・ポウジズにある教会と母親が伯母たちと住んでいた家と地主の邸宅マナー・ハウスくらいのものだ．

このグレイ・カントリの中心都市はスラウ (Slough) であって，ロンドンから西へ30kmばかりのところにある．ロンドンはパディントン (Paddington) 駅から鉄道で，速いもので20分足らず，遅いのでも3,40分のところだ．筆者は日本を発つ前にあらかじめ英国政府観光庁より，ロンドン―スラウ間の時間表を入手しておいたが，それによると運賃は1等の片道で78p.（ペンス），往復でも1.56，日帰り往復だとも1.15である．2等の片道は52p.，往復でも1.04．日帰り往復だと75p.で，当時の日本円で500円たらずか．現在，9万近くの人口をかかえる一大産業都市である．グレイの時代は小さな市場町であったらしいが，今世紀に入って住宅都市，産業都市に発展．精密機械，自動車，薬品，塗料，製菓など大小400近くの工場があるという．A級道路40号線を左折してストウク・ポウデズへ向うあたりで見た 'Slough' の町名標示が印象的．広い通り，ガソリンスタンド，小さな商店，事務所をまじえた赤レンガの街並みがいかにも新興都市の雰囲気だ．このスラウを中心に，それぞれ3,4kmの等距離をおいて，北にストウク・ポウヂズ，南にイートンが位置し，西5，6kmところにバーナムが隣接している．かつてはこのウインザー (Windsor) 以北の一帯は，森林が生い茂りバーナム・ビーチズ（バーナムのぶな林）と呼ばれた地域．さすがに今なお緑豊かなとこだ．オックスフォードから一部モータ・ウエイ4号線（M4）を南下し，マーロウ (Marlow) を経て，スラウ，ストウク・ポウヂズからベコンズフィールド (Beaconsfield)，チャールフォント (Chalfont) へバスで抜ける道中で見たバーナムの森は，まさしく18世紀の風景画，ターナーやウィルソンやゲインズバラであった．しばしば樹木が道路をおおい，その枝がバスをなでるほどであったが，日本の樹林と異なり，その奥までが見通せるのであった．下枝をはらい，下草を実際に人手で刈り取るのかどうかは知らないが，樹林という樹林がまるで一本一本ていねいに木を植え苔をはりつけた庭園のようであった．樹木の下はやけに広々として，何のさえぎるものもない．'林間の空き地' glade というものはイギリスの森林には不可分の要素だ．樹木は場所によって，かし (oak)，かば (birch)，とち (horse chestnut)，ニレ (elm)，はん (alder) など雑多であるが，いわゆるバーナム・ビーチズは主として，その名の示す通り，うっそうとしたぶな (beech) の古木巨木 (most venerable beeches) だ．ケンリッヂ，エバィンバラがしだれやなぎ (weeping willow) に，オックスフォードが赤銅色をしたコッパ・ツリー (copper tree) に代表されるなら，グレイ・カントリはやはりぶなの木だ．

現在バーナム・ビーチズと呼ばれている地域は，正確にはバーナムの町の北のはずれからストウク・ポウヂズに隣接する一定の自然保護地区に指定された区域をいう．この一帯は 'こけむしてあらくれたぶな' (the rude and moss-grown beech) の古木の森林で，原生林の名残りだという．それでいて想像されるような密林ではないのは不思議だ．1879年にロンドン市 (the Corporation of the City of London) が444エーカーを買い取り，その保存につとめ，一般に開放した．以来，少しづつ買いたして現在は515エーカーの広さをもつ．このバーナム・ビーチズはまだ湖水地方 (the Lake District) やスコットランの高地地方 (the Highlands) ほど一般的ではないが，往時の姿をよくとどめていて，土曜日の午後など都心のほこりと雑踏をのがれてこの自然に憩う人も多いという．

この現在のバーナム・ビーチズ（グレイの時代には 'Forest' と呼んだが）の南端に目と鼻の先きのブリットウエル (Britwell) のキャンツヒル (Cantshill) というところにグレイの伯母* (Mrs Anne Rogers) 夫婦の家**があった．このブリットウエルの伯母の家をいつから，グレイがたずね出したかは不明だが，現存するもっとも古い1734年の手紙はこのバーナムからではないかと***も云われている．少なくとも1736年の夏にはこのバ

* グレイの母親 Dorothy の家 Antrobus家には6人の子供がいて，Dorothy (1685—1753) は下から二番目．下に弟 William (1688—1742)，上には姉3人と兄1人がいた．長姉がこの伯母 Anne (1676—1758) で，次が兄 Robert (1679—1730)，以下 Jane (1681—1771)，Mary (1683—1749) だ．長姉 Anne は1710年，事務弁護士 (attorney) Jonothan Rogers (1667—1742) と結婚．夫婦は子供がなく，グレイを可愛がる．Mary は生涯未婚で Dorothy と生活を共にした．

** この家は Robert Antrobusのものであったが，1730年に没し，姉の Mrs. Anne Rogers へ遺産として譲渡されたもの．後に Rogers 夫婦は，ここからストウク・ポウヂズへ移る．

*** 叔父 William Antrobus（母ドロシーの弟）が牧師をしていた Northants. (Northamptonshire) の Everdon の田舎という説もある．

ーナムに滞在していたことは，現存する二通の手紙から明らかだ．彼はここで緑の小径****を通って，半マイルばかりのところにある‘人気のない’森へ出かけて行き，そこで独りになることを心の慰みとしていると，その1736年夏の2通の手紙の1つに書いている．そして‘山も谷もぶなの老木でおおわれているバーナムの自然の中に独り入り込み，散歩と読書三昧にあけくれる様を述べ，早くもグレイの自然に対する嗜好と態度が確立していることをうかがわせている．

これらの木の1本の根もとにぼくはすわり込むんです．めい想の人という訳．そして昼まで中，そこでその幹にへばりついています．——すると，臆病な野うさぎやすばしっこい小リスがぼくのまわりをはねまわるんだ——楽園のアダムのようなものです，でも普通イヴはいないし，それにぼくはそこでいつも読んでいるが，アダムはヴァージルなんか読んではいなかったと思う*****．

グレイはこのあと暗に皮肉をまじえてではあるが，きいてくれる相手がないからこの自然の中で実際に声を出して，自分自身を相手に話をすると云っている．これはグレイの自然に交わる根になっていて，彼の自然観の核をなすものではないかと思われる．グレイが自然に遊びそこにやすらぎを見い出すようになったのは，特にこのバーナムの森に限った訳ではない．バーナムに限らず，イートンでもストウク・ポウヂズでも，広くグレイ・カントリ一帯の自然に彼が親しんだことはその作品からでも明らかだ．

槲の木が繁った枝をさしのべていて
ほの暗く下かげのひろがるところ
こけむして，あらくれたぶなの木が
傘のように立つ森の空き地
葦の生えた水のほとりに
ミウズの神と二人座って私は考えるのだ
（田舎びて身をらくに足を伸ばして）——福原訳

目に見えるようではないか．これはストウク・ポウヂズから，1742年春に友人R．ウエスト（Richard West）へ，その死も知らず書き送った詩「春のうた」の一節である．この舞台の自然がストウク・ポウヂズなのか，それとも自己の記憶にあるバーナムのそれなのかと詮索しても何の意味もないが，バーナム・ビーチズを中心とするグレイ・カントリの自然であることには間違いない．そこに漂う気分はさきに引用したバーナムからの手紙ともぴったり符合する．グレイの描く自然はたいていこうである．何か重苦しく甘い倦怠，一種の快い悲しみが漂っている．

グレイが都会のロンドンからこの地にはじめて足を入れたのはイートン入学にはじまる．そしてはじめはバーナムに，大陸旅行の2年半の空白を境に，のちにはストウク・ポウヂズにコッバム夫人*の死までその関係はつづくが，彼はこの地で親，友，叔母，伯父などとの多くの別離の悲しみを経験した．ある時はそれが起爆剤となって詩作につながり，その悲しみを和らげた．1741年から翌年にかけてのいっきに吹き出したあの発狂的ともいえる創作欲の奔流などはそれだ．またある時はその悲しみは自然との交りによってメランコリックにいやされようとした．そういう知恵を彼はこのグレイ・カントリの自然から学びとったのだ．

グレイにとって自然は陰鬱な悲しみを吐き出し，心のもやもやを解き放つところであった．放つことにより，彼はその軽減，解消をはかった．彼の描く自然がいつもものうげで重く甘いのは，その吐きすてられた悲しみのせいだ．自然の中にそういう己の内的浄化作用を彼はグレイ・カントリで知らず知らずのうちに見出し体得したといえよう．この浄化作用は自然が自然であればあるほどつよまるのある．彼の内に秘めた悲しみ，満されぬものはすべて「人間」より来るものであった．その人間のくさみをおびた悲しみ心のもやもやが効率よく発散され吸引されるには，自然はおよそ‘人気のない’自然のままの自然でなければならなかった．それは孤高なまでに人の加わらない自然，人間から隔絶された自然の造った自然，ポープ流に云えば神の造った自然でなければならなかったということだ．グレイが自然にまみえる時，たいてい独りでいるのはそのためである．これは自然のもつ荘厳さと神聖さにみちみちた自然であり，奇しくもグレイが‘人生の冷たい奥まった谷間’（a cool secluded vale of life）というように，人間的要素という点では一種

**** イートン在学以来，H．ウォルポウルの友人で，1774年から1782年までバーナムの教会の牧師（vicar）であったW．Coleは，このあたりには大きなぶながあり，この小径は浮世ばなれしていた（romantic）といっている．

***** 1736年8月，バーナムより友人ウォルポウルへの手紙．

* ストウク・ポウヂズの地主屋敷の女主人 Lady Cobhamで，1760年3月没す．

の真空状態になっている自然だ．この自然に人が取り囲まれる時，人とその自然の間に一種の中和作用が生じ，人の内に居すわるもやもやが放出され，浄化されるのである．グレイはこうした‘自然の自然’に美しいと感動し，そこに己の内的昇華を感じたのだ．グレイにとって人の気配を感じさせる自然は自然としての意味を持ちえなかった．彼の描く自然が，また現実に彼のさがし求めて歩く自然がたいてい人里はなれた自然だけの手でできた自然であるのはそのためだ．彼はそれを自然が万古の昔から営々として造りあげてきた深山幽谷の切り立った断崖や渓流，あるいは何千年もの間ただ風雨にのみさらされて，よじれねじれふしくれだった老木に見いだした．彼が一生スコットランドの高地地方やイングランドの湖水地方，ウェイルズとの国境地方など山地を歩きまわったのは，そこにその自然—美と浄化—を求めんがためであった．グレイの自然は単に人間社会を排除した別天地というだけではない．彼はそこに倫理的と感覚的の二つの意味を同時に具備させている．1つは内的浄化，つまり救いであり，いま1つは美，つまりその景観よりくる美的快感である．グレイにとって，自然は自然であればあるほど美しく，またその中和力，浄化力は強まる——これがグレイの自然観であり，自然に対する美学だ．

グレイ・カントリにおけるこの自然観の体得は詩人グレイにとって，また後のイギリス詩史の譜系の中でも極めて重大な体得であったといえる．この自然観は1739年から41年の大陸旅行に於けるアルプス山中の自然美への驚嘆とあこがれにはっきりした形をとって現れている．そしてそれは後年のイギリス国内の湖水山岳地方の旅行でも，そのままうけつがれているのである．また，これはワーズワースを中心する後のいわゆる湖水詩人たち（Lake Poets）につながるよび水にもなっているといえる．事実，湖水地方の自然美をはじめて評価したのはグレイだといわれている．おそらくまた，このバーナム・ビーチズの自然に憩いその美しさを評価したのもグレイがはじめであろう．現在バーナム・ビーチズの南の一隅にあるイースト・バーナム・ハウス（East Burnham House）には，グレイの死後シェリダン（Sheridan）が，その密月をすごしているし，更に19Cにはショパン，メンデルスゾーン，J. S. ミルなども遊んでいるという．こうした‘人里はなれだ’山野の自然美に驚嘆しやすらぎを見い出す風習は事実上グレイをもってはじまるといえるのであるが，それが今やイギリス観光の重要な一翼を担い，人の寄り集まるところとなってしまい，あるいはなろうとしているのは，いかにも皮肉である．

筆者は不運にも，また不注意にも南バッキンアムシャのこのグレイ・カントリを吹く風の如く通りすぎたにすぎないが，それでもバスの窓から垣間見る自然はいまなおグレイの息吹がいきづいている思いがした．

1. Eton

イートンは，ロンドン滞在中の9月のある日リッチモンド（Richmond）駅前に集合して，そこからバスでハンプトン・コート，ウィンザー（Windsor）城の見学に出かけた時，それも帰りのバスがウィンザーを出るまでの30分の間に，一人でイートン校まで行ってきたばかりだ．それも文字通り走ってだ．まるでウィンザーからイートン校折り返しのマラソン競走であった．

余談になるが，筆者はすでにイギリスでは町中は火事とか殺人とかよほどのことがないと走らないものだと聞かされてはいたが，この時も走らずにはおれなかった．これよりもずっと以前に，筆者はシェイクスピアの故郷ストラットフォード・オン・エイヴォン（Stratford-on-Aron）の目抜き通り High Street を，人をぬって走りに走ったことがあった．これはせっかくストラットフォードまで来て，シエイクスピアの妻アン・ハサウエイ（Anne Hathaway）の生家を見る予定のないことを知り，余儀なく例によって，独りで地図を頼りにたずねて行った時だった．生家を出て時計を見ると，とても帰りのバスに間に合いそうにない．そこで得意のマラソンの仕儀となった．だいたい我々の旅は引率の英国紳士M教授が案内するのだが，その場所や時間配分は彼の好みで決まるのでぼんやりしているとこんなことがよく起こるのである．この時は出発時間にはどうにか間に合ったが，仲間はみんなもうバスに乗っていた．その時仲間の一人からイギリス人は街を走らないことを聞かされた．そう言えば走る人を見なかった．ところがこのイートン訪問の3日後またグループで，カンタベリィへ行った時走らないはずのイギリス紳士であるM教授がウエスト・ゲイトの所で街中へ向かって，ものすごい顔をして筆者の目の前をかけて行った．筆者はバスがカンタベリィに着くなり，彼にことわってグループと別れ，独りで手早くカンタベリィを見てすぐにロンドンへ戻る算段をしていたのであった．駅へ出る前に，ウエスト・ゲイトを少し西へ行った所にモア（T. More）の首塚のある聖ダンスタン教会（St. Dunstan's）を丁度訪ねようとしていた時だった．M教授は筆者のそこに立っているのにも気付かず，大きな両の眼は天空を見据え，あわてふためいた

顔をして，カンタベリィの目抜き通りを町の中心に向かって走り過ぎたのであった．イギリス人だって走ることはあるのだ．2ケ月いて，走るのを見たのは後にも先にも，それ切りであった．M教授が走ったのは何でも集合時間の変更をグループに知らせるためだったとか．筆者には関係のないことであった．

テムズ河をはさんで南のこ高い丘にウィンザー城，北にイートンがある．城下周辺の道路は石畳の急な坂道だ．城はロンドン塔と共にウィリアム征服王の築城がその始まりで11Cにさかのぼる．城門前の西側のハイ・ストリートの街並はさすがに古く，半木骨造り（half-timbered）の建物がまじる．その一つの古いパブで，昼食に食べたサケの燻製のサンドイッチは実に美味であった．薄暗い内部，黒々とした丸太柱や屋台骨も印象的だった．昼食といえば，イギリス人紳士M教授に率られる我々はまさに本場イギリス仕込みで，昼食は1時をめどにしたものだ．イギリスではそういう慣習らしく，イートンやウィンチェスターなどの学校でも昼食時間は，1時になっているのは興味深い．ところでこんな古い町でもその目抜き通りに，マークス・アンド・スペンサーのようなチェーン・ストアが進出して来ているのには驚く．新旧混淆だ．城はテムズ河を臨んで東西に長く横たわっている．中央に盛り土をして，その上に円い塔が立っている．ラウンド・タワーといい，いわば天主閣だ．その北側のすぐ下が細長い広場（North Terrace）になっていて，そこからすぐ足下のテムズをおおう樹林を隔てて，イートンが手にとるように見える．"白銀のテムズ"が文字通り白くうねっている．樹林の向こうにイートン校の赤い建物や塔や尖塔が木の間越した見える．グレイが「イートン校遠望のうた」をよんだのもたぶんその辺りからの眺めをよんだのであろう．まさしくその冒頭にある通りだ．

きみたち，はるかな尖塔よ，古えの高塔よ
河ぞいの森に聳えて
学芸にいそしみつつ
ヘンリ王の御霊を尚もあがめているのか．
またウィンザーの丘のいかめしい岩角から
ひろ野を見下している堂塔よ
きみらの眺める林や芝生や牧場の
その青草や下かげや草花の中を
年老いたテムズは流れてゆくのだ，
白銀にくねる川筋を見せて．　（福原訳）

すぐ足下の崖下から向こうへ生い茂っていって，テムズの流れをおおい隠している緑の森に，見え隠れする赤レンガのイートン校は見た目にさほど古い印象を与えない．わずかにキュポラをいただいた塔（tower）や尖塔（pinnacle）が，その歴史を感じさせるにすぎない．そのずっと右手の森の中にテムズの水面が大きくカーブを描いて白く光っていた．

このウィンザー城下の西側を南北に抜けるだらだら坂ハイ・ストリートを城山づたいに北にかけ下りるとテムズ河に出る．そのまま目の前の小さな橋を渡ればイートンの町だ．この橋はウィンザー橋（Windsor Bridge）といって，今日では歩行者専用である．このウィンザー橋の附近のテムズの河幅は非常に広くなっていて，イートン校のボート・クラブがあったり，またボートの造船所も多く，この界隈から世界中にボートが輸出されているという．河の両岸にある建物の多くが赤レンガであるのも目につくことだ．テムズを境に県名も南のバークシャ（Berkshire）から北のバッキンアムシャに地図の上では変わっているが，最近イートン校から届いた手紙を見ると，イートン校はバークシャのウィンザーになっている：Eton College, Windsor, Berks. SL4 6DB. 新しい区画整理が行なわれたのかもしれない*．イートンは現在人口約4,000という古くて静かな小さな町だ．町の中心はもちろん，その名も高きイートン校である．

ウィンザー橋からこれまた余り広くない道が真直ぐ北へ300mあまり続く．これがイートンの古い目抜き通りハイ・ストリートだ．両側の家並みにはウィンザー同様白壁に黒の木柱の浮き出た半木骨造り，くずれかけた煙突（chimney stack や chimney pot），波打っている石板ぶきの屋根などがまじっていて，いかにも古めかしく落ち着いたたたずまいだ．道幅の広くないのが，その落ち着きを一層増している．15c以来幾多のイートニアンたちが，このハイ・ストリートに親しんだことか．グレイもまた何度となく，この道を往来したことであろう．古いパブが目に入った．反対側には郵便局もある．橋に近い方には土産物店もある．やはり観光客が多いのであろう．本屋を捜したがこのハイ・ストリートではついに一軒も目にしなかった．グレイがイートン時代に書籍を買った店にポウト（Potés）なる本屋があると何かで読んで知っていて，あるいはこのハイ・ストリートにありはしないかと注意していたが，それらしきものは見

* Let's Visit England, by Garry Lyle (1973) によると，1974年より行政区画整理が実施されるとある．末尾の付記を参照．

あたらなかった．イートン校はこのハイ・ストリートのつきる所にあるのであるが，その帰りにこの古い通りの途中にあった町の図書館にかけ込んで，18cの書店ポウトのことを聞いてみた．概して町の図書館はその土地のことに詳しく，かつ親切だと聞いていた筆者は，すでにダブリンのダン・レアリ（Dun Laoghaire)*の町図書館で，その親切ぶりについては実験ずみだった．ダン・レアリではマードックの短編 "Something Special" に出る地名と通りの所在を確めたのだった．しかしイートンではポウトの所在はわからずじまいだった．そういう本屋は聞いたことがないというのが，そこで得た答えであった．このハイ・ストリートはイートン校のところでスラウ街道（Slough Road）にかわってスラウへ至る．

Eton College ケンブリッヂ大学のキングズ・コレッヂとともに，1440年ヘンリー6世王により創建．イギリス最大のパブリック・スクールで，ウィンチェスター校（Winchester College，1382創設）についで二番目に古い．このウィンチェスター校とイートンだけはコレッヂと呼ばれる．

当初は，King's College of the Blessed Mary** of Eton beside Windsor の名のもとに創立された教会（church），学校（school），救貧院***（almshouse）の三つの施設から成る一大僧院的総合機関の一翼を担うにすぎないものであった．政変****によりヘンリー王の計画は中絶変更され，学校 school を主体として発展したのが現在のイートン校だ*****．1444年の設立基本法（statute）では僧（fellow priests）100名の外に司祭役（chaplain）10，教会事務職員（clerk）10，聖歌隊員（chorister）16，救貧民（bedesmen）13に対し，教師（school master）1，助教師（usher)1，生徒たるスコラ（scholar）70と規定していた．ところが，1868年制定の現行設置基本法では教会関係はわずかに司祭役のみで2人以下（現在は1人だという）と規定し，スコラ70名はそのまま保持している．これを見てもヘンリーの計画がいかに大がかりなものであったか，そしてその性格がいかに変貌したかわかるであろう．

現在もなお当初の由緒ある70人のスコラたちは存続していて，給費生として学内（旧建物）に生活している．かつてはスコラは学問から衣食住まで一切無料でまかなわれたが，今日ではこのような全面給費は少くなって，一部給費生のスコラが多いという．この給費生のスコラは実際にはコレヂャ（colleger）とよく呼ばれれているが，毎年夏行なわれる選抜試験で選ばれる．その数は卒業等で生ずる空席数により決まるが，だいたい12名程度だという．

このスコラの外に生徒の大多数を占めるオピダン（oppidan）と呼ばれる一群の生徒が約1,100名いる．彼らはスコラと違って授業料を支払い，古くはコメンサル（commensal）と呼ばれ，町に下宿して，そこから通学した自費生であった．それで後*に，町というラテン語（oppidum）から彼らをオピダンと呼ぶようになったという．18cに入ってぼつぼつイートン関係者の中から，多くは学寮長や校長の夫人であったらしいが，自分の家にイートンの生徒を専門に寄宿させるものが出て来て，次第に学校の寄宿舎が整備されていった．この寄宿舎はイートンでは'先生の家' マースタズ・ハウス（master's house）と呼ばれている．まさしく'先生の家'で，先生が住んでいて，その家の主人（master）だ．一つのマースタズ・ハウスでは普通40人前後の生徒が生活する．彼らの在学中の日常生活はこの先生の監督下に置かれるわけだが，実際には主として上級生の監督生（prefect）の指導にゆだねられる．そのしごきは有名だ．例えば，fagging といった軍隊生活じみに蛮行は E. M. フォースター**を出すまでもなく，多くの非難の的になっていた．近年改まったとはいうものの果して，どの程度よくなっているものかしれたものではな

---

* ダブリン湾の南側岬にある港町，イギリスとの連絡船，郵便船の寄港地．独立前はKingstown〔Kíŋkstən〕といった．

** Our Lady ともいう．

*** 今日スラウ街道に面する College Fieldの the wall 南端に Weston's（ウエストン館）があり，Lower Master の宿舎になっている．これは1650年頃建ったものであるが，創立当時の Almshouse の一部を残しているといわれている．創立当時，この辺りに在ったものと思われる．

****Henry Ⅵ（1421—71）は幼少より王位につき，後に精神錯乱を来たし，ランカスター家とヨーク家の争いの末，1461年王位を追われ，ヨーク家の Edward Ⅳにとって代られる．1470年，再び王位に復するが，翌年，暗殺された．

***** 現在でも町に Choir school と almshouse をもつという．

* 17c，Civil War（1642—52）以後のことだとされている．

** E.M. Forster は "Notes on the English Character" の中で，英国の全べての悪と不道徳の根源だといっている．

い．だいたい中産階級以上の子弟が，現在でもなお大多数を占めいるのは，高い授業料，寄宿料のためばかりとはいえない．イギリスのパブリック・スクールは，その名に似合わず案外閉鎖的な学校なのだ．現在イギリス政府の頭痛の種の一つだ．数年前にも中華料理店の息子がイートンに入ったというので，新聞の種になったとか*．後は推して知るべしだ．あの豆紳士たちは心にその肩書きとはうらはらにどんな歪みを持っていることか．考えてみるも空恐ろしい．まさにグレイが言うごとく，'無知が幸せなところでは知るは愚である'わけだ．昔面倒をみたオールド・ボーイがマースタズ・ハウスを訪ねてきて，今度その息子が是非また世話になりたいと言って入学予約申し込みを頼むこともよくあるというから，おそらく親子二代三代にわたって同じマースタズ・ハウスに寄宿するということも珍しいことではあるまい．現在，マースタズ・ハウスは25あって，1,100人に近いオピダンが分散している．

なかなか肝心のグレイの話に移れないでいるがついでながら，その前にもう少し，現在のイートンを紹介しておかねばならない．このマースタズ・ハウスからの通学生オピダンとコレヂャを合わせたのがイートンの生徒でおよそ1,200名．この1,200名の生徒はだいたい13才から18才までの青少年で6学年に分かれている．イートンでは学年をブロック(block) ともいい，そのブロックはAからFまでに分けられ，Fが1学年にAが6学年にあたる．このFからAまでのブロックは大きく二つに分割され，現在は下級2学年FEをロウア・スクール(Lower School) 初等科，上級4学年DからAまでをアパア・スクール (Upper School) 高等科に大別している．Upper, Lower の分け方はパブリック・スクールでは一般的で，イートンでも古くから行なわれている．しかしそれを2年，4年に割るのは，近年のことと思われるが，イートン独特のもので一種の大学受験，というより G.C.E.** のAレベルないしは Scholarship レベル対策であると見る．この6ブロックはさらにいくつかの小さな15名から25名より成る小組'ディビジョン' (division) に分けられる．この小組がクラスに相当するわけで，授業の一つの単位になる．しかも生徒一人一人には初等科ではクラシック・チューター (Classic tutor) と呼ばれる個人指導教官がつき，その生徒の勉強を全体的に監督する．また高等科ではモダン・チューター (modern tutor) という個人指導教官を専攻する教科に応じて選び，その指導のもとに勉強する．高等科で専攻する教科は3教科である．Bブロックまでに G.C.E. のAレベル3教科合格が目標であるという．

現在3学期制をしていて，第1学期は9月中旬より12月中旬，第2学期は1月中旬より3月下旬，第3学期は4月下旬より7月中旬，最高責任者の学寮長はプロヴォスト (Provost) といい，主として学校経営の管理面を担当する．その下に Vice Provost が10名の非在住の評議員 (lay fellow) とともにこれを補佐する．教育面の最高責任者は校長ヘッド・マースタ (Head Master) で，その下に初等科の責任者ロウア・マースタ (Lower Master) がいる．いづれも学内在住である．教師陣は多数の非常勤講師 (part-time staff) の外に，ヘッド・マースタ等を含めて125名ほどの教師 (master) を擁するという．わずか70名の貧乏学生スコラのためにヘンリー王が創設した学校は今やこのように大規模な学校にふくれあがったため旧校舎ではまかないきれず，また近代の科学技術の進歩に応じるために，現在では多くの施設設備が旧校舎と道路をはさんで反対側の西側一帯に建てられている．100室に及ぶ教室，第二図書館，講堂，第二礼拝堂，第二食堂，実験室，機械工場，音楽教室等がそれだ．マースタズ・ハウスもこの一帯に集中しているという．

イートンからオックスフォードならクライスト・チャーチへ，ケンブリッヂならキングズ・コレッヂというコースが英国の出世コースだけあって幾多の人材を輩出している．グレイの友人ウォルポウルの父 (Robert Walpole)，ピット父子 (W. Pitt)，グラッドストウン (W.E. Gladstone)，ウエリントン(A.Wellington) マックミラン (M.H. Macmillan) 等，総理大臣だけでも20人を数える．文人，学者をちょっとあげるだけでもグレイ，シエリー (P.B. Shelley)，フィールディング (H. Fielding)，ハックスレー (A. Huxley)，オーウエル (G. Orwell)，経済学者ケインズ (J. M. Keyns) 等と際限がない．

* 山口大学「英語と英米文学」，第10号：続「イギリス滞在記」—旅を中心として—（和田敏英），p.88.

** The General Certificate of Education（教育一般検定）の略語で，イギリスの中等教育認定の一種の国家試験．これには 1) Ordinary Level, 2) Advanced Level, 3) Scholarship Level の3種類がある．Oレベルは一般必修教科の試験で，公立中学入学後5年16才で，パブリック・スクールでは2年生15才から受験．Aレベルは主として大学へ進学するものが目ざすもので，これに合格しなければ進学できない．Scholarship レベルは最も程度の高いもので，これに合格すれば国から奨学金を受けて大学へ行ける．

ウィンザー橋から300mばかりハイ・ストリートを北進してイートン校に近づくと右手に高さ1nたらずの赤いレンガ塀を道路との間にはさんで，大きな並木の歩道が始まる．歩道の右手前方にゴシック風の立派な石造りの建物がまるで鬼の金棒のような尖塔ピナクルをその頭上にいからせて，横に長くそびえるのが見える．これがグレイの通ったイートン校のチャペルだ．この建物に続いて，今度は質素な二階建ての赤レンガの建物が並木道沿いに続く．その中央あたりにこれもまた素気なくくり抜かれた四角な入口（gateway）がある．これが天下のイートン校の表入口だ．意外だ．表玄関の上には普通ゲイトウエイ・ハウス（gateway house）というやぐらが組まれるものだ．イートンの表入口はその点では例外中の例外といえる．しかしこれはイートン校の建物の変遷を示すもので，それを知る者には不思議ではない．イートンにもオックスフォードのクライスト・チャーチ張りの塔を持つ立派なゲイトウエイ・ハウスがある．しかし今では，というより17c以来この二階建の簡素な建物のため表からは見えなくなっているだけだ．グレイがこのイートンに入学したのはオピダンとしてで，8才の時1724年か1725年の9才になる前だとされている*．当時はだいたい7，8才で入学して17才前後で卒業したらしい．グレイも17才の1734年9月までこのイートンに在学した．グレイがイートンに入るには当時ここで助教師(assistant master）をしていた二人の伯父ロバート・アントロバス(Robert Antrobus)とウィリアム・アントロバス(William Antrobus)に負うところが大きいという．この伯父のうちグレイの母親の弟ウイリアムはグレイが入学して間もない1726年にはNorthants.のEverdonの教区牧師（rector）になってイートンを去り，主として母の兄ロバートの指導を受ける．このロバートも1730年に亡くなるが，ウォルポウルの「思い出」によると清貧質素の徳をグレイにたたき込んだという．植物学者だった彼はまたグレイに博物学の興味をうえつけ，それが後のグレイ特有の採集的分類的知識，博学のもとを開くことになる．彼は将来グレイを医者にするつもりだったらしい．当時医者は弁護士，聖職者と並んで最も尊敬され，最も安定した職業であった．ロバートは死ぬ時弟のウィリアムに，グレイが医学の道に進むなら自分の医学関係書はグレイに譲ってくれるよう指示したという．

グレイのイートンでの学費をまかなったのは，ロンドンで姉メアリと婦人装身具店を開いていた母のドロシイであったといわれる．彼はスポーツ嫌いのやや大人びた少年であったらしい．ウオルポウルの当時の思い出に，「グレイは決して子供じゃあなかった」（Gray never was a Boy.）といっている．彼はまた伯父の博物学もさることながら，当時学問の中心であった古典語のラテン語を修得し，ヴァーヂルを愛読していたという．ウォルポウルも「彼は音楽と詩にすばらしい才を持っていた」(He had a great genius of Music and Poetry.）と言っている．いうまでもなく詩とはラテン語による詩だ．当時の詩稿が一編だけ残っているが，年に似合わぬ見事な出来ばえだといわれている．グレイが詩心を初めておぼえたのも，このイートンであった．友人ニコルズに初めて詩心を感じたのは，何時かとたずねられて，グレイは「授業でなくただ自分の楽しみのためにイートンでヴァーヂルを読みはじめた時だ*」と言ったという．

グレイはここで3人の親しい仲間を得る．彼らは自分たちを4人組'Quadruple Alliance'と呼び，それぞれ特別な雅号を持っていた．4人組の中心的人物は最も年少のホレイス・ウォルポウル（1717—1797）で，セラドン（Celadon）と名乗った．これは田園詩や物語ロマンスに登場する伊達男の名前で，いかにも気取り屋ウォルポウルを思わせる名だ．彼は初代総理大臣Sir Robert Walpoleの息子で1726年**に入学してきた．同じ年に入学したアイルランド大法官（Lord Chancellor of Ireland）の息子でグレイと同年のリチャード・ウエスト（Richard West, 1716—42）は西風を意味するファヴォニアス（Favonius）またはゼファラス(Zephyrus)と号した．彼は4人組の中ではその才をもっとも高く評価されていた．背が高く細身で青白い貌をした内気な少年だったという．いま一人はランカスター（Lancaster）の学校教師の息子，トマス・アシュトン（Thomas Ashton, 1716—75）だ．彼はドライデンの「グラナダ

* グレイが8才で入学したのはLower Schoolの2nd formだという（Ketton Cremer）

* Norton Nicholls の '*Reminiscences of Gray*'（「グレイ回想録」）: it was when at Eton he〔Gray〕began to take pleasure in reading Virgil for his own amusement, & not in school-hours, or as a task.'

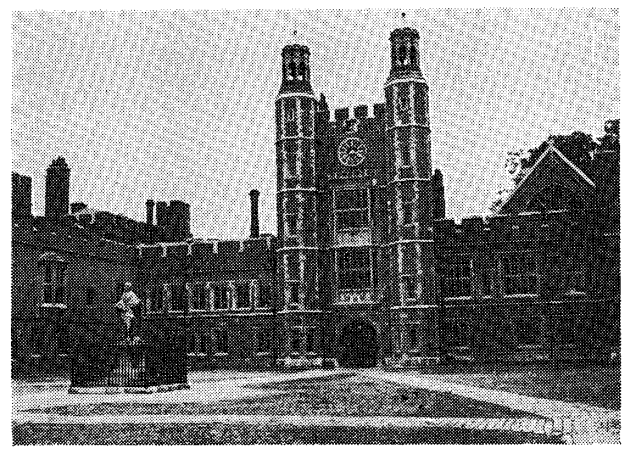
** Horace Walpole's Correspondence, vols. 13—14; ed. by W. S. Lewis (Yale Univ. P., 1970) は1726年4月26日で，tutorはのちのprovost, Dr. Blandの息子Henry Blandだったといっている．ウォルポウルの入学は1727年とする説もある．

の征服」(*Conquest of Granada*) の登場人物アルマンソー (Almansor) の名をとった．芝居か何かでその役を演じたことがあったからだという．アシュトンはグレイ，ウエストと同じ年令で，イートン入学はグレイと同じ頃かその1年前かと思われる．彼は後にウォルポウルの力添えで聖職界に安住したことで，悪い印象を残し他の3人に比し軽視されがちであるが，イートン時代のアシュトンは相当の才人であったに違いない．当時イートンからケンブリッヂのキングズ・コレッヂに進む学生はイートンで選考されていたらしい．アシュトンは1733年にはそのキングズ・コレッヂへえらばれて進み，4人組ではいち早くイートンを出ている．単なる凡才ではありえない．

グレイは自からをオロスマデス (Orosmades) と称した．これはゾロアスター教の主神で愛と光の神Oromasdes の変名．さむがりやのグレイにぴったりの号だ．当時の生徒数はスコラを含めて350名だったといわれる．イエール大学のウォルポウル書簡集*によると，ウォルポウル時代の生徒名簿は2つしか残存しないという．とうぜんグレイの名もその中に拾える筈であるが，グレイについては，何の言及もない．一つは1728年のもので，そのオピダン中の初等料 (Lower School) 3年級 (the hird form) にウォルポウルの名があるという．もう一つは1732年のもので，これは学年別ではなくただ名前の羅列だという．グレイ評伝家 Ketton-Cremer によれば**，グレイは1729年には高等料 (Upper school) に進んでいる．ウォルポウルがグレイより1才年下であることを考慮に入れた上で，このことから推測するに，当時は入学して4，5年後の12才くらいで初等科から高等科へ進み，そこにまた4，5年在学するのが普通だったのではないかと思われる．

この4人組の嬉々快々のイートン時代はグレイにとって，その「イートン校遠望のうた」にもあるように，彼の生涯でもっとも幸福な時代だったといえる．彼は帰り来ぬその頃をなつかしんで云っている：'ああ，幸せの丘よ．ああ，たのしかった木蔭よ，／ああ，むなしくもなつかしい原野よ．／そこはかつて私の悩みを知らぬ少年時代があったところだ，／いまだ苦しみに染まぬ時代が***'．

この'束の間に飛び去る'青春の日々をその透徹した心でうたかたの空蟬とはかなみながらも，このイートンで過した快活で天真爛漫な少年時代をけがれを知らぬこの世の'楽園 paradise'である，と常にグレイは考えていたのだ．



イートン校校庭東側のラプトン・タワー

このグレイの'青春の喜悦を思い起こさせる'イートン校の簡素な四角の表入口を通りから潜り抜けると，そこは広い方形の庭だ．いわゆるスクール・ヤード (School Yard) だ．このスクール・ヤードには緑の芝生はなく一面小石がばらまかれ，その中に方形十文字に石だたみの舗道が打ち込んである．正面東側にはラプトン棟 (Rupton* Range) と呼ばれる2階建ての建物があるが，この中央に八角形の五層の上にオウヂィ (ogee) をのせた塔を左右に配したゲイトウェイ・ハウスがそびえ立っている．この左右の塔にはさまって，ゆるやかにアーチをえがいた門口 (gateway) がぽっかり口をあけている．その真上の二層ほどは張り出し窓 (oriel window) でふさぎ，このオーリエルの真上第4層に大きな時計盤がはめ込まれている．この時計はグレイ時代には南側のチャペルの壁に取りつけてあったものを1765年にこの塔に移したという．この堂々たるゲイトウエイ・ハウスならイートン校の表玄関にふさわしい．通称，ラプトン・タワー (Lupton Tower) と呼ばれ，両脇の二階建ての建物ラプトン棟とともに1520年頃完成したものだ．イートンが現在のような本格的な学校として，その基礎を確立したのはこの頃だという．

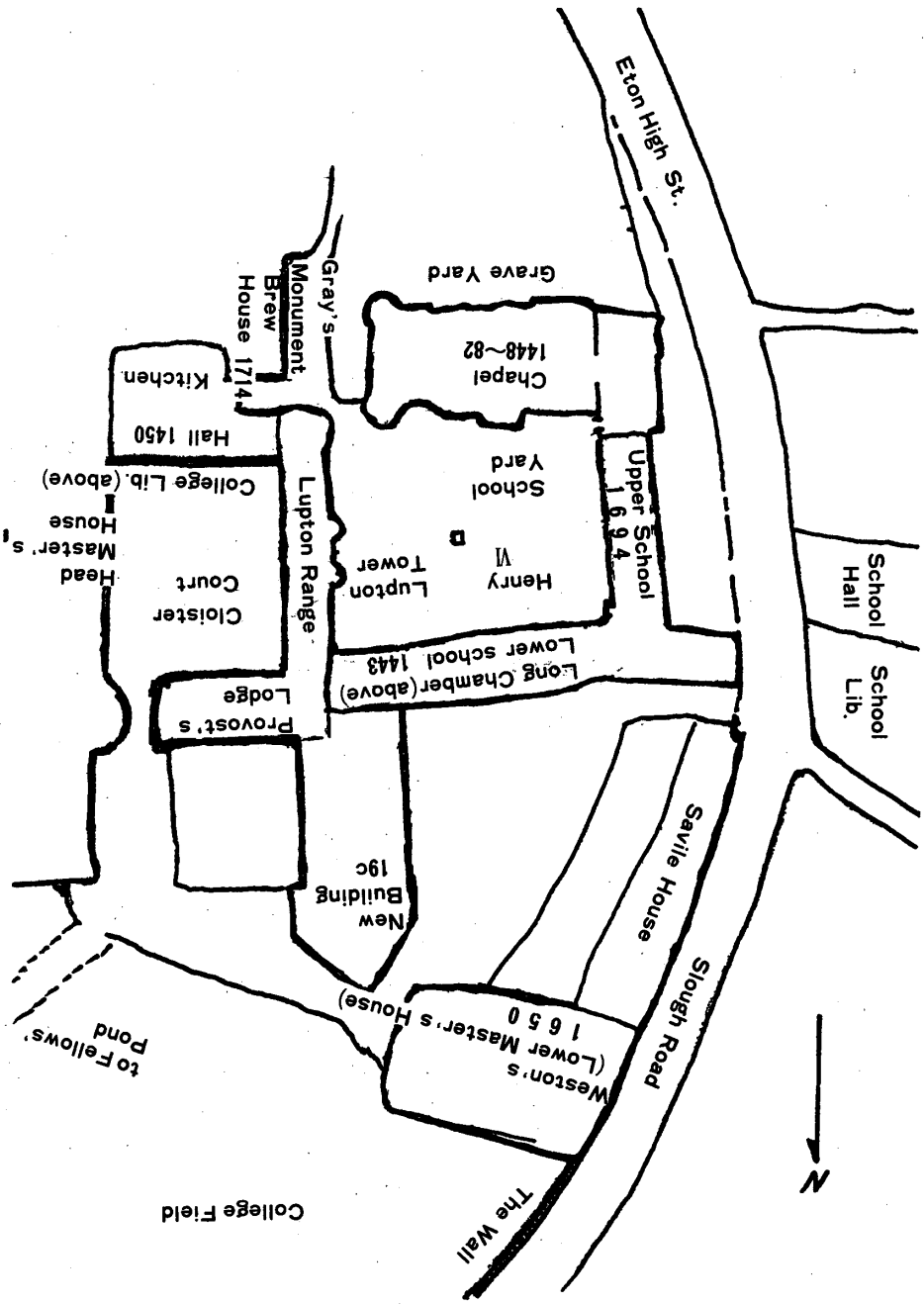
---

* 前頁の脚注**の書簡集，*The Yale Edition of Horace Walpole's Correspondence*；vols. 13—14 (Yale U. P., 1970)

** その著書，*Thomas Gray, a Biography*；Camb. U. P.

***「イートン校遠望のうた」，11—14行．

* Roger Lupton の建立したもの．彼は当時 provost (1504—35) であった．



古くはイートンの建物は大体コの字型を形づくっていたものと思われる．今日のスクール・ヤードの北側ロウァ・スクールはその東のラプトン・タワーの奥の中庭（court）を囲む古い建物の北棟（今日，学寮長宿舎 Provost's Lodge になっている棟）につながり，南側のチャペルはその南の墓地へ通ずる空地をのこして，その東奥にある同じ中庭を囲む建物の南棟（今日の図書館，ホール，厨房となっている棟）へ連なっていたものと思われる．事実，これらの建物は創設間も無い時期の1440年代に完成もしくは着手している建物である．この大きなコの字形の内側を仕切って，のちにラプトン棟及びタワーが加わり，いま東側にある廻廊庭 Cloister Court の方形と西側に小さなコの字形をつくった．そしてこのコの字形も 17c 中期になって，教室不足の解消のためその西側を塞いで増築したために，方形庭となり現在のスクール・ヤードができあがった．この西側道路沿いの教室アパア・スクール（Upper School）が増築されるまでは，ラプトン・タワーが名実ともにイートンの表玄関

として，その雄姿を街道にさらしていた訳だ．

スクール・ヤードからラプトン・タワーを潜ると，緑の芝生の美しい小さな中庭に出る．この中庭の四方をめぐる建物には廻廊（cloister）がついているので，その中庭を廻廊庭（Cloister Court または単に Cloisters）という．この廻廊庭を取り囲む四方の建物はイートンではもっとも古い部分の一つで，グレイの頃には2階建てであったが，1758年西面のラプトン棟を除くほかは三方3階にされてしまった．古くはイートンでは建物は2階建てであった．現在でも古い建物で2階でないのはこの廻廊諸棟とチャペルくらいなものだ．この中庭を取りまく建物は，もともと僧や評議員の生活区域で，彼等の居室になっていたらしい．それをもの語るかのように，今なお当時の水汲み場跡が中庭の東南の角に残っている．現在ではこの一角はコレッヂの本部管理棟の色が濃い．中庭の北面の棟は学寮長宿舎（Provostś Lodge），西は校長（Head Master）及び副学寮長（Vice Provost）の宿舎居室と経理（Bursary）関係の事務所がある．南側は一階にスコラ専用の食堂（Dining Hall）と厨房があり，1450年にはすでに使用されていたという．上は図書館（College Library）である．

この学寮図書館コレッヂ・ライブラリにあるモリス文庫（Morris Collection）の中にグレイのスコットランド及び大陸の旅行記ノートが保存されているという．また出版者の R．ドッヅレー（Dodsley），友人の J．ブラウン（James Brown），ボンステッテン（Bonstetten），ニコルズ（N．Nicholls）の4人にあてた手紙，計31通がある筈である．このうち大部分はニコルズにあてたものであるが，現存するニコルズ宛の手紙のうち1通（1768年5月26日付）をのぞいて全部がこのイートンにある．

イートンの図書館には，別に今世紀初頭に建てられた学校図書館（School Library）と呼ばれる新館がある．表の道路をはさんで反対側にたっている．外観は八角形をした建物で円形の閲覧室をもつ．オックスフォードのボードリンアンのラドクリフ・キャメラ（Radcliff Camera）か大英博物館図書館を模したのであろうか．このスクール・ライブラリには，「エレジー」の現存するグレイ自筆の詩稿3種のうちもっとも古いものといわれるものがある．一般にはこれは「イートン稿本」（Eton MS.），または‘フレイザー稿本’（Fraser MS.）と呼ばれているものだ．この稿本はグレイの遺言により，W．メイソン（d．1797）のものになったが，メイソンからグレイの旧友でもある友人の R．ストウンヒューワ（d．1809）へ譲渡．その死により甥のブライト（Rev．John Bright）の手にするところとなり，1845年競売に出された．これをストウク・ポウヂズの荘園地主グランヴィル・ペン（Granville Penn）が100ポンドで買取ったという．このグランヴィル・ペンなる男はあの有名な米国ペンジルヴァニア州の建設者 William Penn の孫で3代目．ペン家は前地主コッバム夫人の死後まもなく，ストウク・ポウヂズの地主屋敷を買い取り地主におさまったが，グランヴィルの代には“売家と唐様で書く三代目”で，身代がかたむいていたらしい．三代目の道楽かそれとも投機心か，どういう積りでかは分からない．とにかくこのペンのおかげで「エレジー」は奇しくも再びその故郷ストウク・ポウヂズに里帰りした．がそれも束の間，1854年には競売にかけられ，131ポンドでバーミンアムのライトソン（Wrightson）という人に売りとばされた．グレンヴィルは3代にわたった地主屋敷も手放している．さらに20年後の1875年にまたまた競売に付され，230ポンドでフレイザー（Sir William Fraser，d．1898）の手におちついた．そしてフレイザー卿がイートン校に遺贈したのがこの稿本なのである．

この廻廊の東北の角から北へまっすぐ通路を抜けると，あの有名なイートンの運動場（College Field）に出る．「ウォタルーの戦いはイートンの運動場で勝った」（The battle of Waterloo was won on the playing-fields of Eton.”）とウエリントン（Duke of Wellington）にさけばせたのはこのグランドだ．広大なグランドの西端を北へスラウ街道づたいに赤いレンガ塀が廻らされている．周囲はうっそうと樹木がおおい，その緑とレンガのくすんだこげ茶色と目地のセメントの白とが奇妙にしっくり調和してみえた．この塀はグレイの入学する数年前の1717年につくられたものらしい．以来，この塀を使ってやるイートン独特のフットボールが発達して，ウォール・ゲイム（the Wall Game）と呼ばれている．今日なお，11月30日（St．Andrew's Day）にはコレヂャとオピダンの間で戦われる試合は最大の呼びものになっているという．このグランドの東から北側には木立が繁っているが，その樹林の奥にあるという Fellows' Pond あたりはグレイが好んで散歩したところだ．訪ねえなかったのは残念であった．

話を再びスクール・ヤードに戻すと，ここはグレイの頃と殆ど変らない．わずかに変ったところといえば，時計がタワーに移ったくらいのことであろう．通りから表入口を抜けると正面にラプトン・タワーが見え，石だたみがまっすぐそこへ伸びている．そのタワーのまん前の

石だたみの歩道の上に青銅の立像が，まるで通行人に立ちはだかるように，黒い鉄柵に守られ，こちらを向いて立っている．創立者ヘンリー六世王だ．グレイのいう‘ヘンリーの御霊’(Henry's holy shade) である．これは1719年に建てられたらしいから，グレイが1725年に入学した時はキンキラキンに光っていたにちがいない．

このヘンリー六世王はランカスター家とヨーク家の抗争の結果，1471年ロンドン塔はテムズ河にのぞむウエイクフィールド・タワー (Wakefield Tower) の礼拝室 (oratory) で祈禱中，殺されたとされている．今日その倒れたといわれる床には白い大理石の石板 (tablet) がはめこまれていて，こう書いてある：By Tradition／Henry Ⅵ died here／May 12st 1471．その命日の5月21日にはヘンリ六世王の慰霊祭が，イートン校とケンブリッヂのキングス・コレッヂ両校の合同でしめやかに行なわれる．これは‘ユリ・バラ献花式’とでも云おうか，‘the Ceremony of Lilies and Roses’または単に‘Lilies and Roses’と呼ばれている．5月21日，イートン，ケンブリッヂの両校の代表者がビーフイータ (beefeaters) と牧師 (chaplain) に導かれて礼拝堂に入る．短い祈禱の後，大理石の記念石板の左にイートンの代表者が水色のリボンを結んだユリの花束を，右にはキングズ・コレッヂから紫 (purple) のリボンをむすんだ白バラの花束がおかれる．この花束は24時間そこにおかれるという．ユリはイートンの紋章 (coat of arms) にある花であり，白バラはキングス・コレッヂの紋章にある花で，いわば両校のシンボルだ．イートンの紋章は上の左右にフランスの王室のシンボル，フラー・ダ・リー (fleur-de-lis，いちはつ) とイングランド王家のライオンを配し，その下に黒地に3つのユリの花を配している．ユリはイートンの聖母マリアへの献納を意味する．キングズ・コレッヂの方はユリが白バラ* に変わるだけだ．かつてはキングズ・コレッヂの学生はイートン卒業生で占められていたというが，今やこの同じ親から生まれた両校の関係はわずかにこの儀式にしのばれるばかりだ**．

スクール・ヤードの北側は1443年の完成．一階はロウァ・スクール (Lower School) とよぶ世界最古の大教室．アパァ・スクール (Upper School) ができるまではイートン唯一の教室だった．500年以上の年月をこえて，今に使用されている．4,50mもある細長い部屋の両側には，それぞれ互に向き合って，2列の質素な木製ベンチが長く並び，その中央の通路に鳥居のような丸太の柱が立ちならぶ様は稲荷神社の参道をおもわす．柱は階上の床を支えるため，後にたてられたものだという．この柱にはケンブリッヂのキングズ・コレッヂに選抜されたコレッヂャ達が刻したという名前の落書きが多い．16cの中頃には70名の scholar たちは朝5時には階上の大部屋から起き出して，この木肌むき出しの大道場ともいうべき教室で，一斉に6時まで勉強したという．想像するだに壮観だ．当時はむろん勉強といえばラテン語で，学内の生活は一切ラテン語で行なわれた．また金曜日は断食日というきびしい生活だったという．二階はロング・チェインバァ (Long Chamber) といって，スコラの宿舎である．1846年までは下の大教室同様，50m余りもある細長いひと間の大部屋で，スコラの70人全員がこの部屋で起居した．今は個室に区切られて，スコラの一部が依然，居室として用いている．残りのスコラたちはこの東端から北へ突き出した‘新館’(New Building, 19c) に生活している．

この Lower School の向いの南側にあるパーペンディキュラ・スタイル (parpendicular style) のゴシック建築はコレッヂ・チャペルだ．その外観はケンブリッヂのキングズ・コレッヂのチャペルに実によく似ている．1448年に着手，34年後に現在の姿に完成されたのであるが，これはヘンリー六世王の身辺の変化と退位***によるのである．ケンブリッヂのキングズ・コレッヂのチャペルが1446年に着工して，1515年にその完成をみたのに比べれば，決して長いとはいえない．礎石は1441年におかれたが，ヘンリー王は建築に相当の関心をもっていたら

* バラは Henry Ⅵのランカスター家のシンボルであろう．いわゆるバラ戦争といわれるヨーク家とランカスター家の戦いでは，ヨーク家が白バラ，ランカスター家は赤バラを旗印としたといわれる．しかしランカスター家が赤バラになったのは，Henry Ⅵの死後，1485年からだという．

** もっとも，この他に，両校の関係がすべてなくなっている訳ではない．イートンの fellows の1人は King's College の Provost であり，また King's College には現在も24人の Etonians のための scholarship を用意してはある．

*** 1461年，ヨーク家の Edward 四世に退位させられる．1470年再度，王位に復するが，翌71年暗殺される．

しく途中て計画を変更した．1448年に建てかけていた教会を取りくずし，現在のチャペルとなっているものに着工した．ヘンリーの新たな計画では大教会になる予定で，現在のチャペル西端（west end）から街道をつき抜けて，西へ150フィート（約45m）は伸びる筈だったのである．計画通り運んでいたら，このイートンのチャペルはイギリス随一の大寺院になっていたかも知れないといわれている．このチャペルが完成されるまでは，現在その南の墓地になっている場所に小さな町教会があって，それがコレッヂ・チャペルの役をはたしたという．チャペルの完成後，その教会は取り除かれた訳だ．

このチャペルの床は地面より13フィート（約4m）も高い．これはヘンリーの計画で，洪水にそなえたものだという．昔はこの辺りはテムズの水によくつかったものと思われる．北側西端の入口を入って，幾曲りか階段を昇ると南北に細長いチャペル前室に出る．そこの天井をさえぎるように，大きなパイプオルガンのパイプが高いところに目につく．グレイも週に一度はこうして階段をのぼって来たのであろうと思うと，感慨ひとしおであった．丁度，職人風の男が二人上の方をしきりと指さしては，何か云っていた．修理でもするのであろうか．

この前室の中ほどに立つと，東へ細長くのびたチャペル内部の明るい vista が見わたせる．中央の白い石板の通路，その向う正面にやや高まって祭壇（alter）．その祭壇の真上は大きな東窓（east window）が東壁面全面をおおって，天井にまで達している．その彩色あざやかなステンドグラス中央にキリストの十字架はりつけ像（crusifix），その下に最後の晩さん図（the Last Supper）が浮ぶ．中央通路を谷間に，その両側は本堂（nave）の黒々とした木製ベンチがひな段式に互に谷間を見おろすように向きあって，長くつらなっている．その黒々と飴色に渋味をおびたベンチには青表紙の祈禱書が大小二冊づつ重ねておかれていた．その本堂の左側奥，内陣（chancel）との境の高いところから，六角形であろうか，これまた黒々とした浮彫り細工の木製プルピット（pulpit）が見下ろしている．このプルピットといわれる説教台はたいていこの位置にある．グレイの4人組の一人T．アシュトンは，後にこのイートンのフェローにもなっているが，1763年の冬にこのチャペルで説教中，卒中で一度倒れたことがあったというのはこのプルピットなのであろう．天蓋は扇模様（fan vaulting）が施され，晴がましく高い．本堂の南北両側の壁には，今日壁画が見える．これはもともと聖歌隊席になる筈だった今のネイヴを本堂らしく見せるためだったらしく，チャペル完成後間もなくの作だという．16cの中頃塗りつぶされ忘れられていたが，19cの中頃再発見，1923年になってやっと日の目をみる．完全に修復を終えたのは1975年のことだというから，グレイの時代にはこれらは漆くいをかぶって眠っていた訳だ．絵図は北側が聖母マリアの奇跡．南壁にはマリアに救われるある不思議な女帝の物語が描かれている．

このチャペルの東側に，南側の墓地へ入る通路がある．その通路をへだてて東側に，ブルー・ハウス（Brew House）という現在は陳列館になっている赤レンガの建物がある．この建物は運動場のレンガ塀と同じ頃建てられたもので，その色合いといい風化のし工合といい，実によく似ている．元来，これはその名の示す如くコレッヂで消費するビールをつくる酒造場として建てられ，1875年まではその役を果していたという．それでブルー・ハウスの名も合点ゆく訳だ．それにしても学校で酒を醸造するとは，何事だといいたいところだが，そこはさすがに僧院風施設をその始まりとするだけあって違う訳だ．実際，今日でも修道院ではよくワインをつくっている．ドイツなどではビールをよくつくるときく．すべてが自給自足だから，この修道院醸造酒は大体どこも美味らしい．筆者はデヴォンのバックファスト・アビィ（Buckfast Abbey）という修道院で有名なトニック・ワイン（tonic wine）を手に入れたことがある．まさに手造りの正真正銘の赤いワインだったが，実に美味であった．日本でそのお相伴にあずかったものは，こんなおいしいぶどう酒は飲んだことがないといっていた．もっとも，その量が微少であったこともあろう．とにかく修道院では自家用の酒をつくるのだ．グレイの在学時には，イートンでも自家用のビールをしきりに醸造していた訳だ．この醸造酒蔵ブルー・ハウスを背にして教会東うらの通路に，グレイの記念碑が建っている．

この記念碑は第二次大戦の戦死者を記念して，G．モンタギュなる人物よりイートン校に献じられたものだという．グレイとこの戦争との取り合わせは，ちょっと解せない．これに比べたら，ブルー・ハウスなんか取るに足りない．一体にイギリスの学校，教会は戦没者を大切にしているように思われる．日本でも招魂社のようなものはあるが，あれだけの学徒動員と学徒出陣を出しながら，その記念碑を学園内に見ることがない．そこらにも日英の相違がみられるように思う．イートンに限らず，ケンブリッヂでもオックスフォードでも，その関係者の戦死者名の顕彰がよく見られる．イートンでも，アパァ・スクールの下のチャペル入口付近の歩廊，それに方庭

に面する廻廊でも顆しい数の第一次，第二次大戦戦死者名が銅板かなにかに刻んであった．グレイと第二次大戦戦没者との関係があるとすれば，それはいずれともがイートニアンだということだけのように思われる．しかし見方をかえれば，グレイは今やそれほどにイートンの誇る詩人なのだともいえる．

記念碑は全部で2m近くあって，石造だ．四角な台座の上に大小四角の石を二つはさんで，笠の石板がつまれ，その上に杯状のやや凝った石が乗っている．笠の下の石の正面に，先に引用したグレイの「春のうた」の詩行第15行から第20行までが刻されていた：

To Thomas Gray
Befide fome water's rufhy Brink
With me the Mufe fhall fit, and think.
(At eafe reclin'd in ruftic ftate),
How vain the ardour of the Crowd,
How low, how little are the Proud,
How indigent the Geat!
F M

（葦の生えた水のほとりに／私はミューズと二人きりで座り，考える／（無恰好に寝ころんで身をやすめて）／衆人の熱情のなんと空しいことか／誇り高き者のなんと卑しく，なんと小さいことか／偉大なる者のなんとまずしいことか／）

'S' の文字が古い形になっていたのが印象的だった．続いて，この下の石には次のように読める：Prefented to Eton College／by／G. MONTAGU, ／in memory of all thofe killed／in World War II 1939—1945

スクール・ヤード西側，チャペル西端から街道沿いに北へのびてロウァ・スクールへ達する建物はアパァ・スクール(Upper School) と呼ばれる．現在の建物は，チャペルの大部分の窓とともに，1940年にドイツの爆撃に遇ってはいるが，1694年の建．これより30年ばかり前に，最初の Upper School が同じ場所に建設されたが，乱暴な生徒たちの使用にたえきれず，1689年に引きたおされたとか．一説には1694年に完成した現在の建物はクリストファ・レンの設計とも云われるが，その証拠はない．二階建てだが，下は大部分歩廊になっていて，二階がイートン二番目の大教室アパァ・スクールだ．現在は教室としては使用されていないが，1863年までのおよそ170年間，上級生の教育の大部分が，ここで行なわれたという．グレイも勿論，この教室で講義を受けた筈だ．ここでは一度に200名もの生徒に講義が行なわれ，その混乱振りは有名だ．講義をする教師めがけて卵をぶっつけたり，教卓をぶちこわしたりの狼籍ぶりだったという．現在この教室は，シャンデリアがぶらさがり，壁は化粧直しされ，床には絨毯を敷いて保存されているが，元来は部屋の両側に縦に長くベンチの並んだ板張りの粗末な部屋だった．未だに往時の腰板や教卓がそのままあって，それには多くの卒業生が名前を彫り込んでいるという．シェリー，ウォルポウル，ピット，グラッドストウン等の名が見えるらしいが，また室内の周囲にはイートンの著名な卒業生のバストが配置されているが，グレイのものがあるかどうかいずれも確認しえなかったのは残念なことだ．

このアパァ・スクールの下の表入口にあるオフィスで，出がけにグレイ関係のものを見たいがと，後学のため尋ねてみた．この人の許可を得るようにといって，そこの係員が手渡してくれた紙片には，「コレッヂ文書官 P. L. ストロング」と書かれ，イートンの電話番号が添えてあった．この紙片は後でよくみると，イートンの生徒の帰省願 (Application for Leave Away from Eton) で興味深いものだった．後日文書官ストロング氏は，トインビー (P. Toynbee) とホイブレー (L. Whibley) の共編になる「グレイ書簡集」(3巻，1935年) のスター (H. W. Starr) による1971年の再版*に協力した一人であることが分かった．彼はまたコレッヂ・ライブラリの図書館長 keeper をつとめていることも最近知った．時間さえあれば，またとない機会だった訳だ．

* Correspondence of Thomas Gray, edited by the late Paget Toynbee and Leonard Whibley, with Corrections and Additions by H. W. Starr; 3 vols. (Oxford, 1971)

付記：最近，州図書館イートン分館 (Eton Library, County Library) からの情報によると，1974年4月より実施された全英州区分改正にともなって，イートン，スラウ，ストウク・ポウヂズはバッキンアムシャからバークシャへ編入されたという．従って，現状に合わせて正しくいえば，グレイ・カントリイはバッキンアムシャ最南端部ではなく，バークシャ最北端部ということになる．